

第 90 回 J I A アーバントリップに参加して

山下設計 小池聡子

去る2019年5月15日に、洗足学園音楽大学の特色ある建築群「多彩な設計者が奏でるキャンパス協奏曲」アーバントリップが開催された。筆者の前職である日本設計在職時に、視察対象の一つであるブラックホール設計・監理に関わったご縁もあり、約8年ぶりに洗足学園を訪れた。

最初に視察したのは k/o デザインスタジオ +KAJIMA DESIGN のシルバーマウンテンである。3つのリハーサル室を内包する建物は、ダイナミックな弧を描き銀色のステンレス一文字葺きの屋根で覆われている。対をなす事務棟であるレッドクリフはグラデーションのある赤いタイル張りのモノリシックな外観だ。エントランスの石材の目地の取り方、イタリアスタッコ材による壁中塗材の採用などをお聞きし、細心の注意を払ってデザインを積み重ねた熱意に大きな感銘を受けた。北側から見るシルバーマウンテンとレッドクリフの景観は圧巻で、その強い個性にも関わらず、昔からあるキャンパスの舗装やアートなど、既存のランドスケープと不思議と調和していた。特に興味深かったのはシルバーマウンテンと既存ペーブメントの取合部にある側溝である。この側溝は側面が石、底部が手仕事を感じさせるモザイクタイルで設えられ、建物とペーブメントを結び付けている。掘りこまれ、赤銅色に塗られた出入口など、考え抜かれたディテールの集積が、歴史あるキャンパスのランドスケープとの調和を実現している。

次に視察したのは三上祐三+M I D総合設計研究所の前田ホールである。世界でトップレベルの音の良いホールを目指し、設計に奮闘された様子を拝聴した。ホールは長方形のシューボックス型であるが、極力座席以外の吸音材を用いず、反射面を中心に設計された。フラッターエコー防止のため、壁・天井の反射面は凹凸がつけられ音を拡散しているが、座席両側面からメインの反射音が耳に届いてくることが大きな特徴だという。幸運にも学園のご厚意により講師や大学院生の生演奏を堪能することが出来、さらに座席を移動して聴ける貴重な機会を得られた。個人的な感想ではあるが、1階前方席では各奏者の音が独立してダイナミックに耳に届くのにに対し、1階後方席では全体のバランスが取れた総合的なハーモニーを聴くことが出来た。

午後には竹中工務店による教室棟アンサンブルシティーとダンススタジオのあるホワイトキャッスルを視察した。アンサンブルシティーはアルミ押出型材による端正な建築で、隣接する前庭正面にはピンク色に塗られたフォトジェニックな壁があり、12体の彫刻が静かに学生を迎え入れる。端正なだけではなく、光と色彩を用いたラウンジ、階段、廊下などの交流スペースがいわば空間の色気を醸し出している。一方、ホワイトキャッスルはバレエのチュチュをイメージした躍動感あふれるGRCプリーツで覆われた建築である。最東端に配棟されているがキャンパスとの連続感が得られるように、期待が高まるよう光の演出が施されたボードウォークを歩いていく。日本設計によるブラックホールの黒い煉瓦壁を活用し、組織の枠を超えてさらに良い空間を創り出していく手法は、キャンパス計画全体への深い理解と発展性を感じる。

ブラックホール視察の後、日本設計による附属幼稚園を最後に訪れた。この計画を初めて筆者が知ったのは1996年のSDレビューであり、当時日本設計を代表する建築であった。教室と園庭は縁側でつながっているが、その上には緩やかにカーブしながらつながっていくPCシェルの庇があり、心地の良い半屋外空間となっている。保育室には屋根の隙間から柔らかに自然光が落ちてくる。柱と外壁は煉瓦積みからなり、手作りの仕事が見えるかたちが選ばれたという。「空間が人をつくる」ことを念頭に、子供達が豊かな空間とその記憶を持ちながら健やかに成長することを願っている設計者の真摯な姿があった。幼稚園をはじめ小中高等学校、大学3号館など、長きにわたってキャンパス整備に関わり、20年以上の長き信頼を得て今なお学園全体の発展を見届ける建築家の在り方は、凡庸な努力では成し得えず頭の下がる思いである。



シルバーマウンテンと調和するランドスケープ



並び立つホワイトキャッスルとブラックホール